メキシコ便り
CORREOS de MEXICO
46

【メキシコ便り】
日墨戦略的グローバル・パートナーシップ研修計画 研修報告

濵田 明李 第46期(2018年～2019年) 研修生

メキシコのパフォーマンス・アートを巡る一年

はじめに

日墨第46期生の濵田明李と申します。パフォーマンス・アートの作品を中心に発表しているアーティストです。そもそもこの研修計画に応募したきっかけとなったのは、2017年に個人で出かけたメキシコ旅行でした。その時は遠くて今まで馴染みのなかった場所に行ってみたいという思いで、メキシコのイメージは漠然としたものでした。しかしこの会報をお読みになる方の多くがきっとそうであるように、メキシコという国の文化の豊饒さ、愛情深い人々、そしてスペイン語の面白さにすっかり心を奪われてしまいました。更に日本ではなかなか見つけられないメキシコやラテンアメリカのパフォーマンス・アートに関する展覧会や出版物、アーティストたちのインデペンデンントな活動の片鱗を見て、腰を据えて勉強しなかったらずっと後悔するだろうと思い、スペイン語・メキシコ文化コースに応募することにしました。

研修中は基本的にメキシコシティでCEPEの授業を受け、空いた時間や休暇はワークショップやセミナーに参加したり、国際フェスティバルを訪ね歩いたりして過ごしました。このレポートでは、パフォーマンス・アートに関わることを主にして、印象深かった事について紹介したいと思います。

実際の事例について話す前にパフォーマンス・アートについて少し説明を付け加えたいと思います。アーティストの身体を用いた行為そのものを芸術表現とするもので、絵画や彫刻などのメディアに比べると、20世紀初頭からその歴史の始まりを語られることの多い新しめの芸術です。「パフォーマンス」という言葉は用途が広く誤解が生じやすいため、中国に倣い「行為芸術」といって説明することもあります。実際、メキシコ国立自治大学内の現代美術館・MUACで開催されていた1970年代から2014年までのメキシコのパフォーマンス・アートを振り返るアーカイブ展示では、表現形態の説明として動詞的にパフォーマンスという言葉を使いつつも、メインタイトルは“Arte acción en México, MUAC”(メキシコ国立自治大学現代美術館, 2019年2月2日～7月21日)と冠され、美術の文脈上にある一つの独立した分野として語る姿勢が示されています。

CEPEで学ぶメキシコの美術と歴史

研修中に通っていたCEPEの午後の文化クラスにJuan Carlos Campuzano Pérez 先生によるパフォーマンス・アートを含めたメキシコの近現代美術を紹介するクラスがありました。これは本当に驚きました。何故かというとそういった糸口を一生懸命探すつもりで覚悟していたのに、スペイン語を勉強するためのCEPEでいきなり見つけたからです。この授業では日本でもファンの多いチリ出身で60年代からメキシコで活動した映画監督の Alejandro Jodorowsky の前衛的な演劇・映画や、メキシコでの抽象絵画の発展などが紹介されました。その後ナム・ジュン・パイクのヴィデオアートや日本の前衛運動にも話が展開し、先生の芸術的なレジュメや板書と共に毎回楽しみにしていた授業でした。私が日本の美術大学に在学中、美術史の授業は西洋・日本・アジア中心だったのでこうしたメキシコからの視点で美術史を紐解き、地域を超えて活発になり始めた芸術家の交流過程を授業で聞くことが出来たのは大変意義深いものでした。

その他にもCEPEの文化クラスではこれからメキシコの美術を学びたいと思う人がその冒険に出るための基本知識をバランスよく教えてくださる先生が多く、前述のJuan先生の他にも Oscar Molina Palestina 先生の遺跡や美術館への実際の訪問を交えた授業、Aban Flores Morán 先生による多彩なマテリアルを使った美術史解説、Paola Ugalde Andrade 先生の自分でロール紙にメキシコの歴史年表を作ってみる授業、フリーダ・カーロ“以外”のメキシコで活躍した女性作家についての授業は何学期でも受けたいくらいでした。他にもここには書ききれないくらい思い出深いクラスが多く、もう一つ身体が欲しいほどでした。スペイン語が伸び悩んでいた辛い時期もこの文化クラスの豊富さが私の学習のモチベーションを保ち続けてくれました。

CEPE以外にも、メキシコでは多種多様なジャンルのワークショップやオープンクラスが大学や地域の文化センター、プライベートのスペースで開催されていて、何かを学び始めたいと思った時にアクセスしやすい環境がありました。私もふとしたきっかけでUNAMの学生が運営するクラブで、ずっとやってみたいと思っていたフィルム写真の現像を習っていました。教える側も研究者、学生、アーティストなどがそれぞれ自分のスキルや知識を積極的にシェアすることに取り組んでおり、教育普及活動・生涯学習の視点からメキシコを考えてみるのも面白そうです。

Arte acción para espacios públicos

(2019年2月13日～3月20日、Katnira Bello 氏 によるワークショップ
開催場所：MUAC、メキシコシティ)

アーティストの Katnira Bello 氏によるパフォーマンスのワークショップに参加しました。参加していたのは主にメキシコ内外のアーティストや美術を学ぶ学生たち、それから美術館のスタッフです。私はKatniraのこのワークショップに前回の渡航時も参加していました。基本的には身体の訓練をする、デッサンのような基礎を経る、という過程の無いパフォーマンス・アートでは、どう作品のコンセプトを考えるかが重要な点となってきます。

Katniraのワークショップの始まりは極力シンプルな課題をやります。例えば紙1枚でできる数分のことや、動詞一語から発想して何らかの行為をやってみる、などです。その後受講生同士で感じたことをフィードバックします。そこでは何か目標を設定して具体的にそれを出来るようになることを目指すのではなく、成されたことから出発して考えてみるというスタンスが取られています。

次の週には、北バスターミナルに集合して空間を観察し、人の動きや場所が持っている性質について話し合いました。最終日には受講生たちと考え出した公共空間でできるアクションをメトロやMadero通りに試しに行きました。心臓の小さい私は他の受講生の大胆さに圧倒されながらも、その瞬発力や出されたアイデアを吟味する方法など、色々と学ぶことの多いワークショップでした。同世代のアーティストたちと知り合って話が出来たのも良かったです。

Performance en revisión 1990-2019. Prácticas del arte acción, la performance y la documentación en México

(2019年6月8日～7月9日の毎週土曜日、主催：Local21Arte、El Consultorio)

メキシコのパフォーマンスを主にアーカイブの観点から考えるという企画に参加しました。コロンビア出身で、パフォーマンスとアーカイブ研究が専門の Lorena Tabares Salamanca 氏のコーディネイトにより、ゲストのアーティストや研究者が招かれ、90年代以降のメキシコのパフォーマンスについてのレクチャーを聴きました。ウィーン出身でメキシコシティにおいて長年活動するアーティスト・ Doris Steinbichler氏とのセッションによれば、1985年のメキシコ地震以降、地価が下落したローマ地区ではアーティストたちによってオルタナティブ・スペース――営利を目的としたギャラリーでもなく、美術館でも文化センターでもない、実験的な表現を可能にする場所が次々にオープンしたそうです。それはメキシコでパフォーマンス・アートの活況をつくった一因でした。その当時の様子をDorisが持ってきた映像や証言で伺い知ることが出来ました。また、この形に残らない芸術をどう後世に伝えていくかを考える大きな契機になりました。メキシコに行かれたことのある方にとっては想像に難くないと思いますが、広範に及ぶ議論は果てしなく続き、毎回設定された時間より1～2時間は過ぎていて、終わる頃には知恵熱が出そうな白熱ぶりでした。

またアーティストの Monica Mayer 氏と Victor Lerma 氏が運営するアーカイブセンターである「Pinto mi raya」、メキシコのパフォーマンス・アートの常設アーカイブ展示がオープンした「Ex-teresa Arte Acutual」をグループで訪れた他、メキシコシティで開催されていた「Hemispheric」、「EXTRA!」などのフェスティバルにも誘い合って一緒に行き、感想を交換しました。現在はこの活動についてまとめた受講生の寄稿による冊子が最終プロジェクトとして作成されている途中です。

「Performance en revisión」、Ex-teresa Arte Actualでのディスカッション風景

「No Lo Haga Usted Mismo」のポスター

No lo haga Usted Mismo

（2019年８月１日、アグアスカリエンテス、Centro de Artes Visuales）

アグアスカリエンテスで活躍するアーティスト、Antonio Palacio氏とOmar Fraire氏と共にイベントを行いました。私は文化センターの屋上の雨どいを使ったパフォーマンスを行いました。パフォーマンス中は観客の姿は基本的に見えなかったのですが、パフォーマンス後、顔を出してたくさんの観客を目にした時、とても嬉しかったのを覚えています。このイベントはアグアスカリエンテスでのパフォーマンス・アートの活動の一ハブとして、Antonioが主催する国際フェスティバルへ発展する予定です。記念すべき最初のイベントに参加できたことを嬉しく思います。そして、微力ながら今後もこのフェスティバルを応援していきたいと思っています。

Festival Corpórea 5to Festival Internacional de performance

（2019年７月２３日～８月１０日、Ciudadela del Arteほかサカテカス中心街）

これは8月に日墨の期間を延長させてもらって参加したサカテカス中心地でのフェスティバルです。まず初めに、アーティストの Elvira Santamaria 氏による個人指導として一対一でポートフォリオや写真の撮り方のアドバイスを受けてからグループでのパフォーマンスを実践しました。その後、Victor Lerma氏の手話のアルファベットによるワークショップ、Victor Sulser氏のスペイン式カルタによる占いとレディメイドのワークショップも受講しました。そのようなワークショップ・講演会・パフォーマンスが連日朝8時から夜9時まで続き、私自身もソロの作品を発表しました。ディレクターの Ariadna Isis Pérez 氏とその家族、このフェスティバルに集まる人たちはいつも熱心で温かく、コミュニティを大事にしていると感じました。これからもこのフェスティバルが続いて欲しいと切に願います。

その他深く関わることはできませんでしたが、観客として見に行ったフェスティバルはいくつかあり、またメキシコシティではアーティストのソロ作品やショーケース型のイベントなど、ここには書ききれないほどの様々な人たちとの出会いと、パフォーマンス・アートの取り組みを目撃することができました。そして、観客や人的なリソースが得やすいとは言い難い地方で奮闘するアーティストたちも多く目にしました。日本では年間を通してここまで多くの作品を見られることはないため本当に充実した1年間でしたし、スペイン語を学んだおかげでわかってきたことも多くありました。これからもメキシコのパフォーマンス・アートや文化について研究や交流を続けていきたいと思っています。

現在、2020年6月にメキシコのパフォーマンス・アーティストを日本に招聘し、講演・ワークショップ・発表会を開催するべく奮闘中です。まだ非常に小さいプロジェクトチームなので、翻訳や広報などでご支援・ご指導をいただけますと幸いです（プロジェクトのURL：https://www.mejp.me）。

最後になりますが、この研修は私にとってこれからの活動を続けていくうえで自信の元になる体験となりました。日墨生としてメキシコに送ってくださり、本当にありがとうございました。そして親愛なるメキシコの友人たち、苦楽を共にした日墨生の皆さん、日本で応援してくれた家族、友人、先生方のお力がなければこの研修は叶いませんでした。皆様に心より感謝いたします。

筆者によるサカテカスでのパフォーマンス。撮影：Mauricio Saldaña Alfaro

¡gracias!